

映画の中のラジオ

藪崎 ※※

A..... YABUSAKI

中京大学現代社会学部現代社会学科

学籍番号.....

1. はじめに

〈調査対象〉：

作品中にラジオが登場する映画をピックアップし、その作品の中でラジオがどのように描かれているのか、ラジオを作品に使用した意図はなんであるのか、物語に作用しているのかなどを調査する。

〈調査動機〉：

もともとは指導教員の提案で、ラジオが組み込まれている他メディアの調査をするという方向から、調査者である私が映画好きということもありラジオが描かれている映画について研究するに至った。

〈調査方法〉

- ・インターネット検索
- ・DVD視聴による研究
- ・文献収集

〈研究対象〉

- 「引き出しの中のラブレター」
- 「グッドモーニング、ベトナム」
- 「ラジオ・デイズ」
- 「僕はラジオ」
- 「旅立ち～足寄より～」
- 「ラジオ☆スター」
- 「トーク・レディオ」
- 「ラジオの時間（参考として）」

ラジオが登場する映画は他にも・・・

- 「ラジオは笑う」
- 「ラジオ将軍」

「ブース／booth」

「オー・ブラザー！」

「笑撃生放送！ラジオ殺人事件」

「泣きたいときのクスリ」

「プライベート・パーツ」

「今夜はトーク・ハード」

2. 「引き出しの中のラブレター」の分析

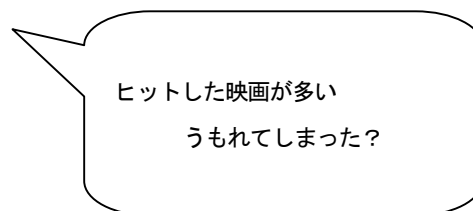
ラジオパーソナリティの主人公真生は父親とケンカ別れして、お互い気持ちを伝えられないままで父親が他界してしまった。その後実家から、父親が伝えたくても伝えられなかった本当の気持ちが綴られた手紙が届く。その体験から、ラジオを通じて心の奥にしまったままの想いを伝える「引き出しの中のラブレター」という企画を立案する。その企画がリスナーの背中をそっと押していく。

●作品中でのラジオの描かれ方

- ◎ 人々の日常生活におけるラジオの位置
 - ・ タクシーの中で1日中ラジオを聞いている運転手
 - ・ ベンチでラジオを片手に休憩する男性
 - ・ 自分の投稿文が読まれるのを楽しみにする学生
 - ⇨J-wave（東京のFMラジオ局）を知らない学生
- ◎ 人と人をつなぐ架け橋・見えない相手との交流
- ◎ 心の奥にしまった気持ちを伝える手段
- ◎ 1対1で向き合う→テレビより本音を出しやすい
- ◎ 段ボールいっぱいの手紙やはがき

●分析

- ◎ 本作品の興行収入 2億円
- ◎ ラジオに現実味を感じない→過去のメディア？
- ◎ インターネットの口コミでは高評価
- ◎ 同時期公開の映画
 - 同日（10月10日）
 - カイジ 人生逆転ゲーム 22.5億円
 - 10月24日
 - 僕の初恋をキミに捧ぐ 21.5億円
 - 沈まぬ太陽 28億円
 - THIS IS IT 44億円



制作が2009年なので、圧倒的にEメールでの投稿が多いはずであるにも関わらず、作品中では何箱もの段ボールに
いっぱいの投稿はがきが描かれている。さまざまなメディアが発達し、多機能化した現代に人の温かみを伝えようとして

いる。また、J-WAVEが制作に関わっているためラジオをズームアップすることによって多くの人にラジオのよさを訴えかけている。

3. 「グッドモーニング ベトナム」の分析

●作品紹介

米陸軍放送の人気DJである主人公のエイドリアン・クロンナウアは泥沼化したベトナム戦争に出征している100万人の兵士の士気を鼓舞するという任務のために、本国から敵地であるベトナムのサイゴンに派遣される。そして彼の強烈的なジョークとロックミュージックによって兵士たちの心は癒されていく。戦争の残酷さとともに、ブラックジョークを多用したユーモア溢れるラジオDJの心情を描く。

●作品中でのラジオの描かれ方

- ◎ 戦地の兵士が現実を忘れられる数少ない手段
- ◎ 放送は軍部のルールや常識によって規制
 - 主人公はそれらにとらわれず、自分のスタンスを保つ
- ◎ 下劣で非常識な放送に送られてくる多くの兵士からのファンレター
 - 兵士のモチベーションを高める
- ◎ 情報操作によって一部のニュースしか読むことができない
 - 真実を聴取者に届けたい主人公のフラストレーション

●分析

主人公は戦争という非友好的な手段によって自らの命や自由を国に捧げた兵士たちに、ラジオという友好的な手段で歩み寄っている。政府は彼を「兵士の士気を高めるため」という理由で派遣したが、彼自身はそのような目的で出向いたのではなく、戦争のくだらなさや無意味さ、さらには国の指揮官たちの考え方がまちがっていることを現地の兵士たちに伝えたいのではないかと考えたのではないかと推測される。その際に自分のDJという立場をうまく利用した。自らも現地で危険な目に遭ったことでより一層戦争に対する嫌悪が大きくなり、自身の代名詞であるブラックジョークを用いて間接的ではあるが最も直接的に近い方法で公共の電波から戦争に対する思いを訴えかけた。だからこそ彼のラジオは現地の兵士たちに愛され、求められたのだと思う。

4. ラジオ・デイズの分析

●作品紹介

ラジオが人々の生活の中心だった監督の幼少時代をもとにしている。祖父母や伯父伯母夫婦などの大家族ひとりひとりの日常にはいつでもラジオが溶け込んでいる。それは彼らに貧しくも楽しい美しい日々を与えていた。その生活の中で起こる数々のエピソードと、華やかなラジオ界を夢見るサリーがパーソナリティになるまでのエピソードがラジオを背景にして描かれている。

●作品中でのラジオの描かれ方

- ◎ ラジオで音楽のクイズ番組
- ◎ 家ではラジオをつけっ放しにしている→ながらメディア
 - 母親の好きな番組 都会の洒落た住宅で優雅な朝食を食べながら夢のような会話を放送するトーク番組『アイリーンとロジャー』別世界
 - 少年の好きな番組 ヒーローが活躍する物語『覆面の騎士』

など、ひとりひとりが巔頂の番組を持っていた

- ◎ 学校の先生「ラジオは悪影響を及ぼす」「誤った幻想を与え、人を怠け者にする」
- ◎ ラジオドラマの中のニュースを本当のニュースと勘違い
- ◎ ラジオ界に憧れを抱く女性、サリー → ラジオ界三華やか
- ◎ 真珠湾攻撃の臨時ニュース < 自分のラジオ出演のチャンス
- ◎ 多くの聴取者が同じニュースを聞いて被害者の無事を祈る → **一体感**
- ◎ ナレーション：

昔ラジオで流れていた音楽やフレーズを聞くと当時の情景が思い浮かび上がる

●分析

この作品は第二次世界大戦を背景としているが戦中とは思えないほど穏やかな時が流れていて、様々なエピソードの裏にはラジオが存在している。ラジオドラマの内容が戦争の物語に変化したリラジオニュースで戦争の状況が放送されたりする場面もあったが、娯楽番組を聞いている彼らのいきいきとした表情は戦争が起こっているという現実を払拭するほどだと感じた。家の中での食事や夫婦げんか、叔母の恋愛話などすべての場面のBGMに必ずラジオ放送があった。それが平穏な雰囲気を生み出す効果を持っている。そのためラジオが日常世界の不安や苦しみから人々を救っているように感じた。つまり、ラジオは日常でありつつも時に非日常を生み出し、その変化が人々に安心を与える。当時のラジオは日常に花を添えるだけでなく、異空間への入り口としての役割も担っていたのではないかな。

4. 「僕はラジオ」の分析

●作品紹介

グラウンドの横をよく歩いている知的障がいの少年がボールを持って行ってしまったためにフットボール部員から暴行を受ける。そしてなぜかフットボール部のコーチがその少年にチームのサポートを依頼する。少年は常にラジオを持ち歩いていてコーチに初めて発した言葉が「ラジオ」だったということもあり、“ラジオ”と呼ばれるようになった。コーチは彼にフットボールの練習だけでなく学校にも参加させるようになるが、批判も多く周囲の知的障がいに対する考え方に不満を持つ。しかし少年がもつ明るさや人間性にまわりの人々も徐々に理解を示し、ついには高校の生徒として認められることになる。

●作品中でのラジオの描かれ方

- ◎ 携帯ラジオを片時も離さない少年 →ひとりのメディア
- ◎ 母親からラジオを通じて音楽を教わり、好きになるきっかけに
→音楽を発信するメディア、教養のメディア
- ◎ もらったラジオを分解してその動きに感動する
- ◎ フットボールのラジオ中継を聞きながら実際にフットボールをする
→同じ場所にいなくても同じ時を共有
- ◎ クリスマスプレゼントにAMを聞けるラジオをもらって喜ぶ
- ◎ 自分をいじめたチームメイトにラジオをプレゼント

●分析

少年は片親で母親が家計を支えているという家庭環境のためにいつもひとりでラジオを持って出歩いている点から、ラジオはひとりで楽しめる内向的メディアとして表現されていた。それを外に向けるきっかけになったのがフットボールやコ

一子との出会いである。母親は知的障がいの少年にラジオを使って音楽を教えた。これはラジオが音楽を聴くメディアの王道であり誰もが音楽に触れられるということと、教養のメディアでもあるということを表している。また、少年が試合会場に行けなかったときに学校のグラウンドでラジオ中継を聞いてゲームの状況を同じように再現しているシーンがあった。これは同じ試合会場にいなくても、ゲームをしているという空間の共有が可能であることを伝えている。この作品は少年が知的障がいを抱えているという設定のため、障がい者との共生がテーマになっているように感じた。しかしそのような中でもラジオの存在感はしっかりと描かれている。

5. 「ラヂオの時間」の分析

●作品紹介

とあるラジオ局で平凡な主婦の鈴木みやこが脚本を手掛けたラジオドラマが生放送されることになった。しかしその裏で生放送ならではの様々なハプニングが起こってストーリーが次々に変化し、しまいには脚本の跡形もなくなってしまう。これにみやこは抗議するが受け入れられず、ストーリーは進んでいく。ディレクターは彼女のまわりに惑わされない純粋な姿に心を打たれ、軌道修正をしようと努力していく。

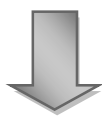
●作品中でのラジオの描かれ方

- ◎ ラジオドラマとテレビドラマの違い
 - ・ SFX（特撮・特殊効果）やCG（コンピュータグラフィックス）が必要なく、「ここは宇宙だ」と言うだけで宇宙空間にできる
 - ・ 人間の想像力がある限りラジオドラマは無限
- ◎ （ラジオドラマでの）生放送のおもしろさ
 - ・ アドリブ
ハプニングからの放送事故を防ぐためにその場を繕う
 - ・ スポンサーとの関係
スポンサーのイメージを悪くしない番組づくり
 - ・ キャストのわがまま
配役に不満をもち、より目立たせようとする
- ◎ 音のみでモノを伝える
 - ・ 機械に頼らずあるもので音を作り出す

●分析

×ラジオ ○ラジオドラマ

この作品はラジオ局が舞台になりストーリーの中心にラジオドラマがおかれてはいるものの、ラジオドラマを放送する舞台裏にスポットライトが当てられ、そこで起こるハプニングを視聴者に伝える道具としてラジオドラマが使用されている。つまりラジオそのものが映画で使用されているわけではないので、ラジオがストーリー内で影響を及ぼしているようには感じられない。



『ラヂオの時間』は研究対象外
(ラジオドラマを研究する人にはいい素材)

6. 今後の研究課題

私（調査者）は今回ラジオが使用されている作品の中からいくつかを選んで、それらを個々に研究した。そのため作品のひとつひとつについて細かい点までをよく理解し、分析することができたと思う。今後はより多く個々の作品の研究をすることももちろんだが、それらの共通点や相違点など複数の作品を比較して調査することも行っていきたい。そのためラジオが使用されている作品全体としての研究にも挑戦し、最終的には個々と全体両方の調査をまとめあげたい。